

## ジェネラティビティの生成過程—学校教育への示唆— Becoming of Generativity: Implications for School Education

立命館大学大学院教職研究科 神藤 貴昭  
SHINTO Takaaki

### 1 ジェネラティビティと教育

現在の我が国においては、世代間の断絶や葛藤にかかわることが指摘されることが多い。少子高齢化が進行し、世代間格差、年金問題、医療や介護にかかわる問題といった問題群が山積している。さらに、核家族化、少子化等により地域社会での多様な世代の間での交流が、かつてと比べてなされなくなっていると考えられる。このような状況にある現在であるからこそ、エリクソン(Erikson, E.H.)が成人期の発達課題としてあげている「ジェネラティビティ(Generativity)」の現代的意義を考えることは重要であろう。

エリクソンの造語であるジェネラティビティは、「生殖性」「世代性」「世代継承性」などと訳される。エリクソンのライフサイクル理論(Erikson, 1959)の中で、成人期の発達課題として「ジェネラティビティ 対 停滞」が設定されていることはあまりにも有名である。人間は青年期において、個人としてのアイデンティティ確立が重要になる<sup>1)</sup>。しかしそれに終わるのではなく、その後、成人期に到達した際には、前の世代からなにかを受け継ぎ、さらに次の世代へ送っていく役割を果たすことが、発達上、意味をもってくる。ジェネラティビティはそのような世代間の継承を表した概念である。

大人が、次世代を担う子どもに、何をどのように継承するべきなのか、継承できるのかを検討することは、教育の在り方を考えるという観点からも重要である。ミクロな視点でいうと、「大事なことが子どもに伝わらない」「子どもが言うことをきいてくれない」という状況は、家庭や学校などで、日常的に経験することである。では逆に、子どもに伝わる、子どもが言うことをきいてくれる、とはどの

ような状況においてなのか。本論文では、このようなことを、事例をあげつつ、先にあげたジェネラティビティという概念をもとに考察していきたい。

ジェネラティビティは「子どもを生むこと(生殖性)、文化を生み出すこと(創造性)、仕事をする(生産性)、人を教えること、育てること等々、様々な要素を含んでいる」(谷村, 1999)とされる。さらに、鑑(2018)は、ジェネラティビティという概念は、「価値の継承」にとどまらず、それを含意した「次の世代への関心をもつ精神」の存在を重視しているとし、それゆえ自身は「世代継承性」より広い意味をもつ「世代性」という訳語を用いてきたとしている。また、鑑(2018)は、この概念は「世代と世代の生き生きとした交流という関係をとらえようとしている」と述べ、背後に「相互性」(mutuality)が構想されているとしている。とするならば、相互性、すなわち鑑(2018)がいう「両者が与え、また同時に受ける」という相互交流の関係が保障されていないと、世代と世代の生き生きとした交流という関係の中、「次の世代への関心をもつ精神」で次世代を育て、重要なものを伝えること、すなわちジェネラティビティの心性を発揮することが困難になろう。では、ジェネラティビティの生成にかかわる、「相互性がある状況」とは、いったいどのような状況なのだろうか。次章では、西平(1993)の議論をもとに考えていきたい。

さて、前述のようにエリクソンの理論では、ジェネラティビティの獲得は、アイデンティティ、さらにそれに続く親密性を確立した後の成人期において、中核となる課題とされている。しかし、老年期におけるジェネラティビティ研究の蓄積(小澤、2012)もあり、本論文では成人期だけではなく、そ

れ以外の段階も含めて、ジェネラティビティの心性を扱うこととする。また、エリクソンは晩年、成人期に限らず「世代から世代へ継続してゆく大きなサイクル」（西平、2019）を「ジェネレイショナル・サイクル」と呼んだが、本研究においても、ジェネラティビティの心性の背後にこのようなサイクルの存在を想定し、大人と子どもの相互性の中でのジェネラティビティの生成過程に着目したい。

本論文では、大人と子どもの相互性に基づいたジェネラティビティの生成過程とその意義について検討し、さらには学校教育への示唆を得ることを目的とする。具体的には、以下のことをめざす。  
①先行研究をもとに、ジェネラティビティの生成にかかわる、大人と子どもの相互性の特徴について検討する（第2、3章）。②ジェネラティビティがどのような場面で生成されるのかを具体的な事例（子ども歩き遍路の事例）をもとに検討し、①で考察したことがらを検証・精緻化する（第4章）。③以上をもとに、ジェネレイショナル・サイクルを生み出す環境について考察するとともに、学校教育への示唆を得たい。（第5、6章）

## 2 ジェネラティビティと相互性

先に述べたように、ジェネラティビティの背後には大人と子どもの間の相互性が存在する。しかしながら、ここでいう相互性は少々複雑である。西平（1993）は、エリクソンのライフサイクル理論の焦点について、「より長いスパンの下に、子どもが、育てられながら育てる者へとなってゆくそのプロセス全体にこそ、目を向けていた」とし「＜子どもと大人の関係＞を見ると同時に、＜その子どもが大人になってゆく道筋、また当の大人が実は子どもであったことの意味を問いながら、子どもと大人の相対的＝関係的な姿＞を、重層的・多声的（ポリフォニック）に描き出そうとしているのである」と述べている。ここでは、エリクソンのライフサイクル理論そのものがアイデンティティ形成の理論が大きな主題としてあるとしても一、ジェネラティビティ、さらにいうと相互性のともなったそれを核につくられていることが示されている。しかもここでいう相互性は、しばしば指摘されるように、大人が子どもから教えられることも多々あ

る、というように、子どもにより大人も発達するという意味を内包しているのみではない。＜かつて子どもだった大人＞が＜これから大人になっていく子ども＞にかかわる、あるいは＜これから大人になっていく子ども＞が＜かつて子どもだった大人＞にかかわる、という関係が想定されている。

子どもにとっての大人、あるいは大人にとっての子どもは、単なる他者ではない、自分の過去や将来を重ね合わせてしまうような他者である。いってみれば、共感してしまうように仕組まれた他者である。したがって、大人と子どもが出会ったとき、互いに文字通り「他人事ではない」と考えることになるであろう。ただし、上に引用した西平（1993）に「より長いスパンの下に」という特徴づけがあるように、例えば、教師－生徒間の相互作用がある場面（例：教師が生徒に注意を行って生徒がふくれっ面をする）について考えると、その場面でみられる行動にだけ注目するのではなく、より長期的な相互作用（1学期あるいは1年間）を読み解いていった場合に、「他人事ではない」ライフサイクル同士の重ねあいが認められるということであろう。

このように、子どもと大人のかかわりは、本来その根底において「他人事ではない」関係性がある。大人からいうと、後生としての子どもはかかわらずにはいられない存在である。子どもからみると、大人は、素直にかはどうぞであれ、一応は言うことをきいておこうと思う存在、あるいはそこまでいなくても、うるさいけれど何か大事なことを言っているのかもしれないと気になってしまうような、尊重すべき存在であるといえる。そのような相互性のもとで、ジェネラティビティが展開されるのが、人間の自然な姿であると考えられよう。

ではなぜ、我々は、「大事なことが子どもに伝わらない」「子どもが言うことをきいてくれない」という状況を、家庭や学校などで、日常的に経験するのだろうか。「反抗期」「コミュニケーション力」という理由だけなのだろうか。「より長いスパン」を想定しても、次世代に伝わらないと感じる状況は経験するだろう。では、どのような大人の現れ方が、ジェネラティビティの生成につながるのだろうか。

## 3 相互性の基底にある「信頼」

ジェネラティビティの生成にかかわる、大人の現れ方にかかわって、注目すべきは、エリクソンが、次のように述べている点である。すなわち、「ジェネラティビティ 対 停滞」が前面に出てくる発達段階 (成人期) に関して、「若い親たちの間にこの段階を発達させる能力の遅れに悩んでいる者もいるようである」とし、その原因を考察するにあたって、「ある信頼の欠如、ある「人類に対する信頼」の欠如にその理由が見いだされることがある」「この信頼によってこそ、子どもがその社会の歓迎すべき預かりものであると思えてくるのである」と述べている (Erikson, 1963)。

「ある信頼の欠如、ある「人類に対する信頼」の欠如」(Erikson, 1963) とはどのようなものか。そして、そのような信頼が生み出されるのはどのような状況においてなのか。ここでまず思い浮かぶのは、エリクソンのライフサイクル理論における第1段階 (乳児期) で重要な課題となる「基本的信頼 (Basic trust)」である。鑪 (1990) は、「基本的信頼 対 不信」に関して、「私たちが生きてゆくためには、世の中を信じ、周囲の人を信じ、何よりも自分を信じていなければならない。それがなかったら私たちはこころの生活をしていくことができない」と述べている。信頼とは、大人にとっても、それがないと「こころの生活をしていくことができない」ものであり、先のエリクソンの言葉でいうと「子どもがその社会の歓迎すべき預かりものである」とは思えなくなるようなものであろう。

以上のようなエリクソンの指摘から、「世代から世代へ継続してゆく大きなサイクル」(西平, 2019) であるジェネレイショナル・サイクルは、世代間の相互性の中で展開されるが、その基底では大人のもつ信頼が重要な役割を果たしていると考えられる。特に、「人類に対する信頼」「基本的信頼」が基底にあるような相互性の中で、ジェネラティビティが生成されると考えられる。「子どもに伝わらない」「子どもが言うことをきいてくれない」という状況は、とくに大人の側の「ある信頼の欠如、ある「人類に対する信頼」の欠如」(Erikson, 1963) にかかわるものと考えられる。なお、Van de Water & McAdams (1989) は、エリクソンのいう信頼 (Trust) と未来への希望 (Hope for the future) が、ジェネ

ラティビティにかかわっていることを実証的に示しており、このことの傍証となるであろう。

ここまでの議論を簡単にまとめると、「大人の信頼のもとでの相互性によって、子どもと大人がうまく交流できる」と言えるが、それでは、ありがちな言説になってしまう危惧がある。これだけでは、豊かな、また微妙な相互性の様相を捉えそこなってしまう。そこで次に、そのような状況について筆者がかかわった事例 (子ども歩き遍路の事例) に基づいて具体的にみていきたい。なぜ、子ども歩き遍路の事例をとりあげるかという点、この後詳細に述べるように、そこにジェネラティビティと教育にかかわる重要な要素がみとめられたからである。

#### 4 子ども歩き遍路にみるジェネラティビティ

##### (1) 子ども歩き遍路の概要

以下、筆者もスタッフとして参加した、子ども歩き遍路 (「鳴門教育大学教育と学校を考える会」(当時) 主催) における事例から、ジェネラティビティが生成する場面についてみてゆきたい。本実践は、2泊3日で小中学生 (大半は徳島県内の小学生) が四国遍路を歩くというものであった。以下で事例としてあげたのは、ともに2007年に実施した、土佐遍路 (1月)、讃岐遍路 (10月) である。

子ども5~6名が1つの班になり、そこにスタッフ2名 (教師志望の大学院生や学部生) をつけ、地図を参照しながら班ごとに歩き遍路を行った。地図を見て歩く道を決めるのは子どもである。研究担当となった筆者が、スタッフである大学院生や学部生、現職小学校教員に、ノート (フィールドノート) を渡し、「子どもと大人の関わり (地域の人、お遍路さん、スタッフなどとの会話など) に関するエピソード」についてメモをとるよう求めた (研究に関しては子どもの保護者にも了承を得た)。なお、以下で掲載した各エピソードのうち※印があるものは、鳴門教育大学教育と学校を考える会 (2008) において紹介されているものである。

四国遍路は、宗教的意味を越えて、広く地域文化として根付いていると言える。例えば、遍路がやってくると、地域の人たちは「お接待」として、飲み物や食べ物を与えるなど、おもてなしをする。遍路は、それに「納札」をお返しするなどする。さらに、



「遍路の中には何らかの理由で国元を追われたり、不治の病を抱え、その救いを求める人も少なくなかった」（佐藤，2004）というように、ケアのような機能を有してきた歴史がある。以上のような文化が存在することはまず押さえておきたい。

なお、本論文では、前述のように、成人期以外の段階も含めて、ジェネラティビティの感覚を扱うこととしたので、子どもの相互作用の相手は、成人や老人、さらには年上の子どもも含めている。次節以降では、子どもたちにかかわってみられた相互作用を、大きく、①子どもと地域の人との相互作用、②子ども同士（年上一年下）の相互作用、③子どもとモノとの相互作用の例にわけて検討したい。いうまでもないが、ジェネラティビティの生成の場面を明確に特定することは困難であり、あくまでエピソードからの推測であることに留意したい。

## （2）子どもと地域の人との相互作用

遍路の途上、地域の人たちから声を掛けられる。それに対して子どもたちは応答する。まず、地域の人との直接的な相互作用場面である。以下、太文字部分はフィールドノートからの抜粋である。

<エピソード1>帽子が飛んだとき、地元の人が、バイクでそれをおさえようとしてくれた。帽子が飛んだ子ども急いでとりに行って、すぐく自然に「ありがとう」と言っていた。（土佐遍路・1日目）

<エピソード2※>最後尾の3名。おばさんが津照寺までの近道を教えてくれる。おばさん「この道をまっすぐ行ってあの信号を左に行ったら、道をあがらないで左に行きなさい。そのほうが近いから。もう少しよ、頑張って」 A君「おそくても得することもあるね」 B君「おばさん優しくかったね」（土佐遍路・1日目）

これらのエピソードは、一見、どこにでもみられるような相互作用である。困っているときに、「地元の人」「おばさん」から助けをもらい、それに反応するという場面である。学校や家庭においても、教師や親との間で、このようなことが生起するであろう。ところが、重要な違いがある。当然のことながら、「地元の人」「おばさん」がその場所にいたこと、さらに、そのような行動をとったことは、偶然である。いわば職務や親といった役割とは関係なく「地元の人」「おばさん」が生起させた出来事

である。ここでみられた相互作用は、非計画的、非役割的であり、偶然の出会いによってもたらされたものであり、したがって、真正性が認められる。

これは、先に述べた「人類に対する信頼」「基本的信頼」といった意味での信頼をもったものであると考えられる。そこから相互作用が開始された。次のエピソード3のように、そのようなところから生じる優しさに関して、そもそも「どうしてだろう？」と考える子どももいた。

<エピソード3>すれちがう地域の人に頑張ってねといわれて少しうれしそう。道を教えてくれた人を見て、やさしいね、どうしてだろう？などの声も聞こえた。（土佐遍路1日目）

さらに、次のように、地域の人から「叱られる」という出来事も生じた。

<エピソード4※>ある子どもの金剛杖が溝にはまって折れてしまった。近所のおじさんに注意を受ける。リーダーが金剛杖の取り扱いについて、注意を促すべきである。金剛杖が折れてしまった後、次のお寺に向かう途中で、さっき杖を折ってしまったから、しっかりお参りして償おうという、発言が見られた。（スタッフに対して）（土佐遍路1日目）

金剛杖は弘法大師の化身<sup>2</sup>で「同行二人」を体現する大切なものであり、地元の人たちにとっても大切なものである。溝にそのような杖を入れて遊びながら歩いていることに対して、「近所のおじさん」から注意されたのである。これも役割とは関係なく、偶然そこにいた大人が、見知らぬお遍路姿の子どもを信頼して、注意するという出来事である。歴史的・文化的背景の影響もあいまって、真正性のある注意となったと考えられる。子どもはこれに「お参り」で応答している。

以下は、T君が遍路という文化の中で、「おばちゃん」の気持ちを悟り、それに応えることができた事例であると考えられる。

<エピソード5※>SちゃんやR君がトイレに行きたいのではないかと思ったので立ち寄らせてもらった（お接待を常にしている場所らしい）。T君はいすに座っていて「自由に飲んでくださいと言われてもペットボトルだけではな・・・」とか言っていた。（中略）彼はちゃんと飲んでいた。甘いものがほしかったのかもしれないが、おばさんがコップやお

茶を持ってきてくださった後だったし、その時の表情からおばちゃんのお接待が本物やとわかったから、自分も飲まなあかんと思ったのではないかと思った。（土佐遍路2日目）

また、次のように、地域の人から子どもたちへの間接的な影響もあった。

<エピソード6※>宿を出てからしばらくは畑を通る道でした。自分たちは朝早く起きて出発している、と感じている子が多いようでしたが、畑では、おじさん、おばさん、おじいさん、おばあさんがもうすでに土を耕したり何かしらの作業をしていらっやいました。その姿をみて、「みんな朝から早いなあ」と素直に感心したり、「私のおじいさん、おばあさんも畑をしている」とか、「畑はしていないけれど起きるのはとても早いよ」と話が始まりました。（讃岐遍路・2日目）

ここでも、非計画的、非役割的であり、偶然性、真正性が認められる地元の「おじいさん」「おばあさん」などの姿を見て、子どもたちはそれを自らの身近な家族に重ね合わせている。他者のためにあるいは自らの家族のために黙々と働いている姿は、自身の祖父母から自らへの信頼を感じさせるに十分だったかもしれない。直接的な相互性がみられたわけではないが、「畑のおじいさんなど→子どもたち→自らの祖父母」というような、相互性に似た作用がみられたといえる。

より直接的な相互性という観点でいうと、次に示すエピソードのように、大人からのかかわりにより、子どもたちがより積極的に大人にかかわりたくなる、という出来事もあった。

<エピソード7※>27番札所の神峰寺から下山しているときに、他のお遍路さんと出会いました。そのときに、子どもが「あのお遍路さんにチョコあげよう」と言ってきました。お遍路さんに声をかけると「チョコは、もっているからありがとう」という返事をもらって「アメをあげよう」と言っていました。（土佐遍路3日目）

以上のようなエピソードでみられた、「地元の人」「おじさん」「おばさん」「おじいさん」「おばあさん」「他のお遍路さん」たちは、もちろん子どもたちとは初対面であり、その場所にいたこと、そのような行動をとったことは偶然である。それなのに、

子どもたちに教育的にかかわる。さらに、子どもたちもそれに応答する。このようなジェネラティブティの生成の背後には、先に述べた「人類に対する信頼」「基本的信頼」といった意味での信頼を大人が持ち、子どもたちにかかわり、さらに子どもたちが応えるという状況が存在していたと考えられよう。見知らぬ他者が見守ってくれ、世話をしてくれること、そして、それにお返ししたくなること、そのような関係性のもとで、「世代と世代の生き生きとした交流」（鑑、2018）が展開されている。

ジェネラティブティというからには「価値の継承」がみてとれるはずである。子ども歩き遍路では、どのような価値が継承されたのか。エピソードに基づいていうと、「他者に親切にすること」<エピソード1、2、5、7>であり、「ものを大切にすること」「みんなが大切にしているものを大切にすること」<同4>であり、「働くことの重要性」「働いてくれていることのありがたさ」<同6>である。さらにそもそも「見知らぬ大人が親切にしてくれるのはどうしてか?」<同3>というエリクソン流の疑問を抱かせたことも重要である。またそれぞれのエピソードには、四国の遍路文化の継承の中で生じていることも指摘しておきたい。

上にあげた価値自体は、道德教育をはじめとした学校教育で扱われたり、家庭で親に言われたりすることでもあろう。だが、子ども歩きお遍路で継承されたそれらは、非計画的、非役割的な教育であり、偶然性、真正性が認められる。そのような性格を持った相互性であり、それは、先に述べた「人類に対する信頼」「基本的信頼」といった意味での「信頼」を子どもたちに感じさせる。原因は定かではないが、上記のような経験が、以下のようなふりかえりを誘発したのかもしれない。

<エピソード8>2日目とか3日目に歩いているとき、子どもたちの一部から家での失敗談とか、こんな悪いことをしましたの告白とかいう話が出てきた。別に私がさそったわけじゃないんだけど、急に子どもたちが話し出した。（土佐遍路2、3日目）

### （3）子ども同士（年上-年下）の相互作用

子ども同士においても、ジェネラティブティの心性が顕在化してくる。年上の子どもが年下の子どもの世話をすることがみられるのである。しか

しそれは「葛藤」の中で生起することが多い。以下は、年上の子どもが年下の子どもに対してもつ葛藤と、その解決過程である。解決過程においてジェネラティビティが垣間見える。

<エピソード9>2日目になると、小さい子が若干遅れるようになりました。しばらくすると、先を歩いていたH君、R君が立ち止まって振り返り、「大丈夫?」「休もうか?」「まだ歩ける?」などの声をかけるようになってきました。また、H君は、ペースが速いと感じたら、立ち止まり女の子が追いつくのを待っていたり、荷物を持とうとしたりしました。1日目は、全く後ろを振り返ることなく我先にと進んでいたのに、小さい子や女の子に気づかうという姿勢が見られました。(讃岐遍路・2日目)

<エピソード10※>異年齢グループであるがゆえに、歩くスピードも大きく異なるため、班が解体してしまうこともしばしばみられました。そんな時、「離れていても心は通じあっている」と感じられる微笑ましい光景がたくさんみられました。たとえばしりとりをしながら仲間を感じあっている班、後になっても先になってもお互いを待ちあってみんなで歩こうとした班、見える範囲を歩いていることで安心感や互いの存在を感じあっていた班。(土佐遍路・1日目)

ここにみられる、年下の子どもを世話する年上の子どもの姿は、「大人」としての子どもである。「全く後ろを振り返ることなく我先にと進んでいた」(エピソード9)「班が解体してしまう」(同10)ような状態に至るまでは、単に「子ども」であった。ところが、いつの間にか年上の子どもは、年下の子どもを世話する存在になった。すなわち、「声かけ」「しりとり」などで、危機的状況乗り越えた。危機的状況は、放置することもできたが、なんとかして、年下の子どもを世話をしつつ、一緒に歩きたいという意識が現れてきた。つまり「大人」となったのである。ここにも、年下の子ども、自分と同じ道を歩んできた者への信頼、すなわち歩いてくれるという信頼、がんばってくれるという信頼がみられたと推測することもできよう。

次のエピソードは、年下の子どもの成長に年上の子どもが戸惑う様子を、スタッフが見て取った部分である。子ども同士においても、「子離れ」の

寂しさのような感情を抱くという事例である。

<エピソード11>2日間自分が手をひいて連れて行っていたのに、今日は自分をおいて元気に進んでいく姿に少し悲しい気持ちもある様子。くやしいなどという声もあった。そのうち、私も元気ださないと!負けてたまるか!と言って、追いかけて行ったりもしていた。守ってあげなければと思っていた子が成長していったうれしい反面、悲しい面があるのがわかった。(土佐遍路3日目)

#### (4) 子どもとモノとの相互作用の例

遍路道には、先に遍路道を通った人や地域の人からのメッセージ、あるいは先人が作ったモノが置かれていることがある。時間差があるが、ジェネラティビティの心性にかかわるメッセージとして、子どもたちには受け止められた。

<エピソード12※>遍路道にさりげなく、でも存在大きく吊り下げられていた「がんばれ」と書かれた「道しるべ」に勇気づけられていた子どもたちがいました。いつだれが書いたものなのかはわからないけれど、疲れた時には見えないはげましを感じることができました。(土佐遍路・1日目)

<エピソード13>雲辺寺に上っていく途中、お祈りしている可愛い仏像のようなものがあり、女の子がそれを見つけたとき、手をあわせて「無事に頂上まで歩いていきますように」とお願いしていた。その姿がとても印象的だった。(中略) さっきまで「きつい」「疲れた」と言っていた言葉とは全く違う声質で、とてもやさしく、純粹さが感じられました。(讃岐遍路・3日目)

上記エピソードで言及された「道しるべ」「仏像のようなもの」は、子どもたちにとっては、いつだれが書いたのか、作ったのか、わからないものではある。しかしながら、確かに、先に歩いた人、先に生きた人が存在していて、後生への想いを残していると、子どもたちに受け止められたといえる。先人は、後生を信頼して何かを残す。その結果「はげまし」(エピソード12)を受けたり、「やさしさ」「純粹さ」(同13)がみられるようになった。なお、今村(2020)は、四国遍路において「遍路道標は常設の接待」であると指摘しており、本事例においても同様の作用が認められたと考えられる。



## 5 ジェネラティブティ生成の条件

### (1) 信頼

これまで検討してきた、①子どもと地域の人との相互作用、②子ども同士（年上一年下）の相互作用、③子どもとモノとの相互作用に関するエピソードにおいてみられた、ジェネラティブティの生成の特徴と、それを生み出す環境についてまとめると、次のようになるだろうか。仕組みのない偶然的な出会いや非計画的な出来事、すなわち予期できない状況において、異世代からの信頼が子どもに感じられたとき（信頼の一撃、ともいうべきか）、「ジェネレイショナル・サイクル」の「歯車」（西平、2019）が噛み合う。まさにジェネラティブティ生成の瞬間である。さらに子どもは、その信頼を受け取りまた、次の世代に送ってゆく。世代間で継承されたものは、「他者に親切にすること」「ものを大切にすること」「みんなが大切にしているものを大切にすること」「働くこと」「他者が働いてくれていること」「四国の遍路文化」「年下の子の面倒をみること」などの重要性、価値である。

ここで重要なのは、相互作用の基底にある信頼の現れ方である。すなわち、大人からの信頼がまずあって、そこから相互作用が始まる、という点である。まさにエリクソンのいう「ある信頼の欠如、ある「人類に対する信頼」の欠如」があるならば、ジェネラティブティの生成は始まらないという点である。もちろん、子どもの姿勢や言葉が、大人からの信頼を呼び起こすこともある。しかし、それが刺激になったとしても、まずもって大人の側の「ある信頼」や「ある「人類に対する信頼」」がないと歯車のかみ合いは始まらないだろう。このことについては、次章で純粹贈与の観点から考察したい。

### (2) 偶然性

いま一つ注目すべき点は、5（1）で列挙した、「他者に親切にすること」などの重要性や価値は、言葉で伝えられたものではないし、また、計画されて伝えられたものではなく、偶然の出来事の中で、大人からの信頼に付加されて伝えられたものだという点である。森岡（2018）は、これまで身の上のことを語らなかつた、あるグループホームに在籍している80代の女性が、コラージュ技法の場で、孫世代にあたる調査者に、家族について語り出し

た事例を紹介している。森岡（2018）は、「この女性がコラージュの場に参加し調査者に会うというのは、予定されたものではなく偶然である。自分の人生の一端を吐露したのも、出会いの中でたまたま生じた。ジェネラティブティの成立において偶然性という契機は看過できない」と述べている。

本研究で検討したエピソードについても、役割とは関係なく、偶然そこにいた大人が、見知らぬ子どもを「信頼」して、声をかけたり注意をしたりする、それに子どもたちが応答する、という偶然的な出来事を契機とした展開からの歯車の噛み合いが多く見出された。偶然にもかかわらず、見知らぬ関係にもかかわらず、という点が、大人の側が「ある信頼」や「ある「人類に対する信頼」」をもっていること、大人たちの思いが真正性をもつものであることを、子どもたちに見抜かせたのではないかと考えられる。この「にもかかわらず」という点が、信頼形成においては重要な状況を提供するのではないか。森岡（2018）においても「ジェネラティブティの成立において偶然性という契機は看過できない」ということの原理的説明はなされていないが、偶然性とジェネラティブティの関係は、今後考察すべき重要な課題といえよう。

### (3) 文化的制度

ここまで、偶然性の重要性を指摘してきたが、偶然的な出来事を意味づける、文化的制度の存在も無視できない。ここで存在したのは、遍路という文化的制度である。その制度の中で、お接待、おもてなし、声かけなどが展開される。このような制度がなければ、大人が子どもに声をかけることすら困難かもしれない。大人を後押しする制度の存在と偶然性という、一見、二律背反的な条件のもとで、ジェネラティブティが生成されたものと思われる。

さらに、遍路は、基本的には大人が行うものと、四国の人たちの中で認識されているであろう。したがって、子どもたちにとっては、大人の世界に参入するという意味合い、通過儀礼的な意味合いをもつことになる。子どもの遍路を見る大人は、大人の世界への一步参入の祝福の意味もあり、より一層、ジェネラティブティからの関心を子どもに注ぐことになると考えられる。

また、遍路をする大人は、地域の大人や子どもに

としては「異人」であり、「非日常」にいる人たちである。浅川（2008）は、四国遍路の巡礼路沿線の人たちの立場から巡礼者をみた場合について、「とくに聖地に至る巡礼路沿線においては、巡礼者は非日常的な状態にありながら、彼らの日常生活を通過するという状態にある」と指摘している。歩き遍路をする子どもは、通常の遠足とは異なって、地域の大人の日常世界を通過する、聖性を付与された非日常的存在となっていたことも考えられ、このことがより子どもへの敬意をもった接近を促したといえるかもしれない。

このように、子ども歩き遍路においては、「ジェネレイショナル・サイクル」の「歯車」（西平、2019）が噛み合う状況を支える文化的な制度の存在があったことは否定できない。

## 6 学校教育への示唆—教育学の諸理論から—

### （1）学校におけるジェネレイビティ

これまでの検討から、ジェネレイビティの生成にあたって、偶然的な出会いや非計画的な出来事のような予期できない状況において、大人の「信頼」が子どもに感じられたとき、「ジェネレイショナル・サイクル」の「歯車」（西平、2019）が噛み合うことが考えられた。また、それを支える文化的な制度の存在の意義も考えられた。これらから、学校教育への何らかの示唆が得られるだろうか。

学校においては、教師は、生徒や社会一般から、あるシステム、役割の中で動く、ととらえられているし、実際そうであり、そうでないと学校は成り立たない。言い換えると、教師は、役割として、過剰なほどジェネレイビティを発揮することを求められる存在として認知されている。したがって、もはや偶然性や先述した「にもかかわらず」といった、あまりに「牧歌的」な状況が現れるのを待つことは一般的には困難であろう。ではどのようにすれば、予期できない状況における異世代からの信頼、それを支える文化的な制度、というエッセンスを維持したまま、ジェネレイビティを生成させ、「子どもに伝わらない」「子どもが言うことをきいてくれない」という困難さから脱出できるのだろうか。

このことについて、これまで教育学において用いられてきた諸概念である、「純粹贈与」（矢野、

2014）、「半身の姿勢」（田中、2012）および「状況的学習」（Lave & Wenge, 1991）という視点から考察したい。後に示すように、各概念に基づいてジェネレイビティを考えるならば、それぞれに対応して、ジェネレイビティの原理論、臨床論、社会文化論へと展開でき、これらの議論が学校教育領域への示唆につながるだろう。これまでの議論に対応させると、「純粹贈与」は偶然性のもとでの信頼、「半身の姿勢」はそのような信頼にかかわる教師の姿勢、「状況的学習」はそれらを支える文化的制度について、それぞれ学校教育と関連させて考察することができる概念であると思われる。

### （2）純粹贈与

5（1）において、「大人（年上）からの信頼がまずあって」という言い方をしたが、ここで思い出されるのが、「純粹贈与」である。子ども歩き遍路では、大人は子どもに見返りのない贈与を、思いがけない形で行っていた。学校教育においてはどうか。矢野（2014）は、「人はなぜ先生となるのだろうか。先生とは、先行する誰か（先生）から教えるを無償で与えられたことがあり、その贈与されたという出来事の故に、誰かに贈与する者のことである」とし、「贈与のリレー」が生起していると述べている。他方で矢野（2014）は「しかし、この事態をとらえて、「先生は贈与しなければならぬ」と口に出してしまうと、この義務を乗り越える純粹贈与の運動は、すぐに不自由な社会的道徳的義務へと転落してしまう」「私たちが先生に出会っているのなら、そのときその先生は意図することなく贈与しているのだ」としている。

教育＝サービスととらえると、教師と子供の教え・学ぶ関係は、純粹贈与ではなく等価交換となる。すなわち、子ども側が支払う授業料や教育に使われる税金、教員の給与と、教師から与えられる子どもの資質・能力の等価交換である。矢野（2014）は「交換を破壊する贈与的先生」から始まる「贈与のリレー」を提唱している。しかしながら、「等価交換」も教育公務員や私立学校教員である限り、役割として必要なことではある。等価交換の中で、不自由になってしまったジェネレイビティを回復させることこそが重要であるといえる。それでは、ジェネレイビティの回復にあたって、具体的には



教師はどのような姿勢をとるべきか。次項で「半身の姿勢」ということをヒントに考えてみたい。

### （3） 半身の姿勢

田中（2012）は、大人と子どもの関係について、「忘れ去られているのは、自分自身が<「ここといま」で「永遠の今」に触れるパトスとしての存在と生成>であることである。この忘却が乗り越えられ、今一度、相互認識と相互生成が達成されるためには、私たちが現にある世代関係に積極的にコミットし、他の世代と部分的な役割関係に限定されない半身の構えによって連携し、相互性を生きたのでなければならない」という。

「部分的な役割関係」とは、例えば、教師である、生徒である、カウンセラーである、といった他者との制度的な関係性があげられる。そのような役割を遂行しつつも、それだけではなく、<「ここといま」で「永遠の今」に触れるパトスとしての存在と生成>をも生きるような、「半身の構え」というあり方を提案している。田中（2012）のいう異世代間の「相互認識と相互生成」はジェネラティビティそのものであるといえる。学校という場においては、教師と生徒がそれぞれの役割を遂行しつつも、<「ここといま」で「永遠の今」に触れるパトスとしての存在と生成>に開かれることが重要であるといえる。具体的には、役割としてのかかわりとそれに縛られないかかわりのバランス、ということであろう。これがジェネラティビティを生成させる信頼にかかわる教師の姿勢と考えられる。

### （4） 状況的学習

5（3）で、「ジェネレイショナル・サイクル」の「歯車」（西平、2019）が噛み合う状況を支える文化的な制度の存在の意義について触れた。ここでいう文化的な制度とは、過去から、コミュニティに受け継がれてきており、意識や行動の文法を伴う、「吸引力」をもった規範とでもいうようなものである。学校においては、このような文化的な制度が存在するのであろうか。学校に関連して制度というと、教育制度や教育課程、学校におけるしきたりなどが思い浮かぶが、ここではより簡単に、莫大な時間が費されている教科学習について考えてみよう。つまり「学校で教科を学ぶ」ことへの「吸引力」についてである。

この問題に関しては、状況的学習理論（Lave & Wenger, 1991）により説明できるだろう。この理論によると、学ぶということは、ある文化をもったコミュニティへの参入プロセスである。学校教育に関する議論においても状況的学習理論が援用され、認知的徒弟制というアイデアも存在する（Collins, 2006）。だが、そもそも学校教育において想定する、参入すべきコミュニティを何に措定するかという課題があり、筆者は、これをひとまず、科学を愛好するコミュニティであると措定したが（神藤、2016）、そのようなコミュニティにおける「吸引力」を、ジェネラティビティの観点から検討することも必要であろう。

「学校で教科を学ぶ」ことへの「吸引力」が存在するためには、これまで大人から学んできた人、あるいは現在先代から学んでいる人としての教師の姿を自然とみせること（みせるというよりそのような状況に開かれていること）も重要である。さらに言うと、そもそも上記のようなコミュニティが存在しているのだろうかという問題もある。大人が、科学を愛好し重視するような世界を生きているかということである。つまり、教科学習の先にある「大人の世界」を、教師をはじめとする現在の大人が生きているかどうかということである。

### （5） まとめ

本論文では、ジェネラティビティが、これからの世代継承や、広い意味での教育にとって重要な概念であると考え、まず先行研究をもとに、ジェネラティビティの生成にかかわる大人（年上）の「現れ方」について検討した。その結果、「人類に対する信頼」「基本的信頼」が大人の基底にあるような相互性のもとで、ジェネラティビティが生成することが示唆された。そこで、具体的な事例（子ども歩き遍路）をもとにこのことを検討したところ、偶然性と文化的制度の重要性が考えられた。

また、その上で、「純粹贈与」（矢野、2014）、「半身の姿勢」（田中、2012）、「状況的学習」（Lave & Wenger, 1991）という概念から、いささか性急ではあるが、学校教育への示唆を得た。教師という役割、学校という制度の役割を果たしながらも、それに縛られず児童生徒と全体的にかかわる瞬間をもつこと、そして教科学習の先にある大人の世界を、教

師をはじめとする現在の大人が生きることにより、「贈与のリレー」が出現し、ジェネレイショナル・サイクルが活性化されると考えられた。

予測困難であるこれからの社会に必要な資質・能力を育成することが重要であると謳われ、各方面でその努力がなされているが、他方で、児童生徒にとっての教師がどのような存在として現れるかを検討することなしには、その効果も期待できないであろう。今後、学校教育をジェネレイショナル・サイクルという大きな視点から捉えなおすことも必要ではないだろうか。

#### 注

1 ただし、複数のアイデンティティを並列してもち、かつ葛藤がみられないような「多面的アイデンティティ」という在り方もみられる。木谷・岡本 (2018) を参照のこと。

2 四国八十八ヶ所霊場会のサイトでは、金剛杖について「古来より道中の歩みを助けてくださる金剛杖は、お大師さまの象徴(お大師さまそのもの)として考えられてきました。道中の精神的な支柱となります。」と説明されている (<https://88shikokuhenro.jp/> 2021年2月12日現在)。

#### 文献

- 浅川康宏 (2008) 『巡礼の文化人類学的研究 四国遍路の接待文化』古今書院
- Erikson, E.H. (1963) *Childhood and society* (2nd ed.). New York: W. W. Norton & Company. (エリクソン, E.H., 仁科弥生訳 1977 『幼児期と社会1』みすず書房)
- Erikson, E.H. (1959) *Identity and the lifecycle. Psychological issues Vol. 1, No.1*. New York: International Universities Press. (エリクソン, E.H., 西平直・中島由恵訳 (2011) 『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房)
- Collins, A. (2006) Cognitive apprenticeship. In R.K. Sawyer (Ed.), *The Cambridge handbook of the learning sciences* (pp. 47-60). New York: Cambridge university press. (コリンズ, A. 認知的徒弟制 ソーヤー, R. K. (編) 森敏昭・秋田喜代美 (監訳) (2009). 『学習科学ハンドブック』(pp. 41-52) 培風館)
- 今村賢司 (2020) 「道標石から見た四国遍路」愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター (編) 『四国遍路の世界』岩波書店 85-101.
- 木谷智子・岡本祐子 (2018) 「自己の多面性とアイデンテ

- ィティの関連—多面的アイデンティティに注目して—」『青年心理学研究』 29, 91-105.
- Lave, J. & Wenger, E. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge: University Press. (佐伯胖訳 (1993) 『状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加』産業図書)
- 鳴門教育大学教育と学校を考える会 (2008) 『「出会い、かわり、生きてゆく」体験活動—子どもたちが教えてくれたこと—』鳴門教育大学教育と学校を考える会
- 西平直 (1993) 『エリクソンの人間学』東京大学出版会
- 西平直 (2019) 『ライフサイクルの哲学』東京大学出版会
- 森岡正芳 (2018) 「意味構成の「ジェネラティブティ」」岡本祐子・上手由香・高野恵代 (編著) 『世代継承性研究の展望 アイデンティティから世代継承性へ』ナカニシヤ出版 31-43.
- 小澤義雄 (2012) 「老年期の Generativity 研究の課題: その心理社会的適応メカニズムの解明に向けて」『老年社会科学』 34, 46-56.
- 佐藤久光 (2004) 『遍路と巡礼の社会学』人文書院
- 神藤貴昭 (2016) 「学習コミュニティにおける「ネガティブ感情」の意味—認知的徒弟制論を手掛かりとして—」『立命館教職教育研究』特別号, 91-100.
- 鑓幹八郎 (1990) 『アイデンティティの心理学』講談社
- 鑓幹八郎 (2018) 「Erikson の「ジェネラティブティ」概念の基盤—精神分析理論と Erikson の人生—」岡本祐子・上手由香・高野恵代 (編著) 『世代継承性研究の展望 アイデンティティから世代継承性へ』ナカニシヤ出版 21-29.
- 田中每実 (2012) 『臨床的人間形成論の構築—臨床的人間形成論第2部』東信堂
- 谷村千絵 (1999) 「E・H・エリクソンのジェネレイティブィティ概念に関する考察」『教育哲学研究』 80, 48-63.
- 矢野智司 (2014) 「負債の教育と贈与の教育 「借りの哲学」を教育から考える」『at プラス』 20, 9-19.
- Van de Water, D.A. & McAdams, D.P. (1989) Generativity and Erikson's "Belief in the Species". *Journal of Research in Personality* 23, 435-449.